

日本植物学会の一会員に戻って

岩槻 邦男 (1993-1996 年 会長)

前言

研究者が個別の研究活動をする一方で、学会に集い、学会活動に参画するのは、単独では弱者である個人が、たとえば国家をつかって個人を護る活動を構築するようなものですが、国家がつくられると個人を護るよりも国家を維持するために個人が犠牲にされるのが常態になるように、学会が100年を超えるような長期間活動を続けていると、学会そのものが独り歩きをする危険性も生じてきます。それにもかかわらず、学会活動の活性化が求められるのは、学会活動を通じて個別の研究を発展させようとするのではなくて、個人では対応できない研究の総体を振興させるのと並行して、科学行政にかかわる成果を学会という集団に期待するためと思います。だから、もっぱらボランティアな貢献が期待される学会活動にエネルギーを割く人たちは、貴重な時間を割いているのですが、その個人が報われるというよりは、学会活動に積極的に参画していない人と平等に利益を享受しているわけですから、不公平を感じることもあるはずですが、ボランティアな貢献というのはもとよりそういうものなのでしょうから、むしろ積極的な貢献をする人の方が、貢献しない人よりぼやきが少ないというのも現実かもしれません。

わたしの場合、日本植物学会でも、会長をはじめ表に名前が出る役割をいくつかやらせていただきましたが、活動に積極的に貢献してこられた人たちに比べて、自分のやれたことが日常的な業務

の消化でしかなかったことを反省し、そのくせ学会から受けた恩恵が大きいことを考え直して、学会活動を構築するのに積極的に貢献してこられた方々にあらためて感謝しているところです。

そのことをもっとも強く感じたのは、第59回大会が金沢で開催された1995年のことでした。わたしはこの年、学会の大会が開かれる直前に東南アジアへ調査に出かけ、ラオスでアカダニに噛まれ、大会の始まりに合わせてようにツツガムシ病を発症し、虎の門病院に入院してしまいました。その年は学会会長の任にあたっておりましたが、病院のベッドで高熱にうなされていて、とうとう大会には参加できませんでした。たぶん、学会会長が大会に出席しなかった唯一の例かと思います。もちろん、そのことに申し訳ない気持ちは大きかったのですが、当時専務理事を務めてくださっていた大隅良典さんらの適切な仕切りもあって、大会は何の瑕疵もなく運営されたと聞きました。会長は総会でご挨拶する程度の役割で、本人不在でも大会の実質的な運営にはあまり役に立っていない存在だったと実感したものでした。もっとも、会長もさまざまで、実質的に指導力を発揮される方もありますので、これは、歴代会長の活動のうちにはそういうこともあったというひとつの事例に過ぎません。

学会に対する姿勢もさまざまかと思います。わたしも、積極的に学会活動に参画するつもりで会員になったのではありませんでした。私がまだ京

大の教養部の学生だった頃に、大会が京都で開催されました。名前だけで知っていた先生方のお顔を見、声を聞かせてもらおうと、大会会場へ通いました。当時、登録料を払っていないから、会員でないから、などという条件で聴講を排除されるような雰囲気はありませんでしたので、無断での聴講です。しかも、会員でもないのに聴講しながら、入会しようという気はありませんでした。

わたしが日本植物学会に入会したのは大学院も数年目に入ってからでした。当時、近畿支部の支部長は、京大の教授が輪番で引き受けておられ、担当の幹事は若手の教官や年長の大学院生が引き受けるのが例になっていました。その年、わたしにその役が廻ってきました。役員を引き受けるためには会員であることは必須の条件です。わたしは支部の幹事をやらせていただくために入会の手続きをとったというのが実状でした。もっとも、だから幹事の役割も適当にごまかしたというのではなく、その役割はそれ相応にこなしたようには思っています。しかし、そのような姿勢で会員になったのですから、それ以後も、与えられた役割にはそれなりに対応してきたと思いますが、正直いって、特に日本植物学会に他と違って力を注いだと自慢できることはありません。

役員を卒業してから、再び学会活動には距離を置くようになってしまい、大会に出かけるのも間遠になってしまいました。第76回姫路大会には、久しぶりにちょっとだけ顔を出させていただきました。新免輝男大会会長の獅子奮迅の活躍ぶりに1会員として参加することで協力したいという気もありましたし、非常勤ではありますが兵庫県で働いている立場としてもこの大会は見逃すべきではないと思ったからでした。ここでも、自分の学会への参画のあり方が正統ではないと感じました。

役割だけを数えれば、近畿支部の幹事に始まって、いろいろの役員も経験しました。わたしが会員であった間にも、学会は任意団体から社団法人へ、さらに公益社団法人へと、その構造は2度の転換を経験しました。そのような歴史を通じて、

わたしもその時々には、それなりに努力していたつもりだったのですが、後から考えると、役割をきっちり果たしていたとはとても考えられません。それなのに次々と役目が廻ってきたのはどういうことかと考えてみますが、いい答えは見つかりません。

やるべきだったことについての達成感に不安を感じているというのに、このような機会には会長経験者としての寄稿が求められます。実際、誰が学会活動を支えて下さっており、誰がその成果を享受しているのか、こういう機会にあらためて考え直すべきではないかと思います。そこで、学会の果たす役割について、自分の経験に基づいて、日頃考えていることにここで触れさせていただくことが、機会を与えていただいたことに対するもっとも大切な応答かとも思います。

日常活動の成果と評価

会長を務めたこともあってですが、わたしはいくつかの省庁の委員会など科学行政にかかわる機会もありました。わたしはそういう場で議論するのがうまくなくて、そういう席で上手に意見を述べる人を見て羨ましく思ったことがしばしばでした。もちろん、領域を代表して出ているのですから、自分としては全力でよかれと思う方向に動いたつもりですが、いかんせん才能の乏しい者にはその範囲でしか成果は上がりません。しかし、会議の席に座っているだけでも、わたしたちの分野に好意的な発言をして下さる人はいつでもあったものでした。それだけのことが、わたしたちの分野でできていたからでしょうか。もっとも、総論賛成でも、個別の事例で投票に入ると、メンバーの多い分野が成果を得てしまうのは、民主主義の結果というものです。

東京大学を定年退職した時、自分の性格に合わないところを無理してたくさんの委員会等に出席していたのを、もう辞退してもいいだろうと、新規の依頼を口実をつくって断っていたことがしばしばありました。もっと有能な人がやって下さればいいと期待もしておりました。すると、生物学

から1人というような委員会には、代わりに入る人は必ずしも植物学関係者とは限りません。会合での対応が下手であっても、その場にいるのといないのでは、影響力に明瞭な差がでてくるのは当然です。そういう経験から、当該分野から、関連の委員会等に出る人の数が増えることは、その分野にとってプラスになることは歴然たる事実だということをやというほど知らされていたものです。

ただし、わたしの経験では、羨ましく見るほど口舌巧みに説得したように見えた場合でも、それで結論がその分野に必ずしもいい効果をもたらすとは限りませんし、たとえある時それが成功にいったとしても、実質的な内容がともなっていないければ、何らかのかたちで後できびしい評価がもたらされたように思いました。巧みな表現をする人が、いつでも委員会の結論を得るとは限らず、結局は実力を積み上げた領域がそれ相応に認められるという事実を経験したものでした。現実のきびしさを感じていない楽観的な見方だといわれることもあります。科学行政の勝者は、優れた研究業績の上がっている領域の代表者なのだ実感した次第です。

Journal of Plant Research も関係者の努力があってインパクトファクターの高い雑誌になっています。そうするためのさまざまな戦略が積み上げられましたが、一番大切なことはいい論文がたくさん掲載されるようになったことです。学会活動の成果の多寡は、科学的な成果がどれだけ大きいかにかぎります。成果を盛る器を整えるのは学会活動の世話を引き受けている人たちの責任ですが、学会の評価を高めるのは、参画する会員みんなの科学への貢献の度合いによることは今さら喋々することでもないでしょう。ただし、その成果を外に向けて発信することの意義がますます大きくなっている現実も見逃すことはできません。

つい先日、広州で開かれた国際会議に出ましたが、出逢った1人に「初めまして」と挨拶したら、「IBCの時にのお世話になりました」という反応が返ってきました。日本人と特に協働のプロジェクト

のないその人は、日本へ来る機会はありません。そうなのですが、まだ若かった頃に横浜の国際植物学会議で発表し、さまざまな論議に参画したことが自分の宝になっている、と、多少お世辞の気味もあつたのでしょうか、日本の植物学への好感を語ってくれました。若い頃に国際会議に参加し、何らかの刺激を受けることが研究生活の大切な基盤になることは、わたし自身もそうでしたが、実際に多くの人が経験することでしょう。多くの会員が下支えをしてつくりあげた国際会議も、結局は有益な科学的な議論の場が提供できたことが最も大切な成果だったことを、20年近くたってもう一度確認したことでした。

植物学と科学リテラシー

せっかくの機会ですから、学会活動について、もしわたしが何か建設的な提言をすれば、ということ、いろいろ並べても実現不能でしょうから、1点だけ挙げさせていただきます。科学としての植物学の振興については、今さら取り上げるべき話題はないと思います。

科学者の側からも、科学の領域における貢献を期待される科学者の役割が *science for science* への成果を期待するものであることは当然で一貫して不変であるとしながらも、それに加えて *science for society* の視点も取り入れるような活動が期待されるようになっていきます。しかし、社会のため、社会の役に立つ科学、早くいえば儲かる科学であるかのように語られるのは日本における病弊のひとつかもしれません。植物学のような基礎科学の分野でも、生産につながり社会の富に直接的に貢献する分野の振興が必要であることは今さら多弁を要することではありませんが、その前に、市民の科学的思考の充実に貢献する文化としての科学の面での役割もまたきわめて大切な役割であることが忘れ去られがちです。最近の原子力に関するさまざまな出来事など、社会における科学について、科学者が考えるべき課題が突きつけられているように思います。

日本人の科学リテラシーの低さはその問題点の

ひとつであり、それだからこそその科学リテラシーの向上に、科学者側からの積極的な貢献も必要ということでしょう。

科学に関する生涯学習支援は、評論家的に科学を論じる人だけに任しておけるものではなくて、現に科学に貢献している人たちにしかできない部分が大きく期待されます。確かに、研究に没頭している人が、もうひとつの役割に大きな時間を割くことは難しいでしょう。しかし、研究者も市民としての日常活動はするものですし、その活動のうちから日本人の科学リテラシーの向上に寄与することは不可欠の役割かとも思います。研究に没頭

していて、国が戦争に巻き込まれていることも知らなかった、というような話が美談であったのは歴史上の物語でしょう。

これまで、植物学会などでは、文化面での社会貢献の活動はごく一部の限られた人々のボランティアな努力に依存していました。学会としても、社会貢献とは何かを模索している分野の人の知恵も借りながら、会員の大多数が参画できるような活動の構築を考える時期になっているように思います。科学を特定の専門分野だけに閉じ込めておくのでは、その領域自体の活性化にもつながらないのが現実かとも思います。